

令和4年度

第40回  
福祉体験

作文コンクール

優秀作品集

©aichikenshakyo

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

## はじめに

本会では、昭和五十八年から「福祉体験作文コンクール」を実施しています。本年度は、小・中・高等学校あわせて百九十四校、三百三十六名の児童・生徒の皆様からご応募をいただきました。依然として続くコロナ禍により、児童生徒の福祉実践教室や夏休みの青少年ボランティア福祉体験学習が縮小される中、この作文コンクールにご応募いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

近年、様々な場面において児童・生徒などの若い世代が多様なボランティア体験や福祉活動に取り組む機会が増え、福祉やボランティアへの理解・関心が広まってきております。本会といたしましても、今後、地域福祉活動への支援や福祉教育活動への充実に向けて、より一層取り組んで参りたいと考えております。

このたび、選考委員会において厳正なる審査をし、二十七編の入選作品が決定されました。ここに、本年度の優秀作品集を作成しましたので、今後の福祉教育活動の推進にお役立ていただきたいと思います。

最後に、審査にご協力くださいました各委員の方々、作品の応募にご協力くださいました各小中高等学校、各市町村社会福祉協議会、さらにはボランティア関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

令和五年二月

はじめに	1
目次	2

小学校低学年の部

わたしのかぞく	豊橋市立豊小学校	一年	片山智咲	4
えれべーたーのつかいかた	半田市立乙川東小学校	一年	加藤李律	5
食べもののきふではじまるたすけあい	長久手市立西小学校	一年	田中遥馬	5
ヘアドネーション	大口町立大口北小学校	二年	齋藤 滢	6
どうしたらよろこんでくれるかな	春日井市立丸田小学校	三年	長江おう木	7
デイサービスってなあに	清須市立桃栄小学校	三年	澤村 えん	8

小学校高学年の部

みんなの笑顔	江南市立宮田小学校	四年	平野 貴也	9
手話はとてもすてきな言葉	新城市立千郷小学校	四年	中西 柚乃	10
ぼくの大好きなお父さん	知多市立旭南小学校	四年	竹内 桜人	11
私にできる福祉活動	弥富市立十四山東部小学校	四年	伊藤 愛栞	12
「手話講習会に参加して感じたこと」	豊橋市立幸小学校	五年	舟田 佳叶	13
福祉は人のためならず	弥富市立栄南小学校	五年	加藤 里緒菜	14
耳の不自由な方の大変さを知って	豊川市立赤坂小学校	六年	野澤 葵真	15
むずかしくない「ボランティア」	大口町立大口北小学校	六年	渡邊 絢太	16



介護について……………	幸田町立幸田小学校	六年	三浦真菜	17
-------------	-----------	----	------	----

中学生の部

それぞれの普通……………	半田市立亀崎中学校	一年	佐藤保仁	19
小さな勇気……………	碧南市立南中学校	一年	奥田苺花	20
考えが変わった福祉実践教室……………	碧南市立中央中学校	一年	杉浦伶	22
自閉症を知る……………	弥富市立弥富北中学校	一年	永久桜輔	23
これからを生きる私たちに必要なこと……………	清須市立西枇杷島中学校	二年	西田百花	25
高齢者を支える介護……………	岡崎市立美川中学校	三年	江坂祐依	26
「利他共生」……………	一宮市立浅井中学校	三年	福田風紗	28
「私がボランティアをする理由」……………	刈谷市立雁が音中学校	三年	鍋田颯希	29
人と人との心のつながり……………	知多市立知多中学校	三年	金田奈々	31

高校生の部

理想の介護福祉士になるために……………	愛知県立宝陵高等学校	一年	太田愛唯	33
「出会い」……………	学校法人さくら学園安城生活福祉高等専修学校	一年	檜垣光里	34
コミュニケーションの重要性……………	愛知県立桃陵高等学校	三年	忠政伶奈	36

審査経過……………				38
-----------	--	--	--	----

作文コンクール要項……………				39
----------------	--	--	--	----

# わたしのかぞく

豊橋市立豊小学校一年

片山

智咲

わたしのかぞくは、まいにちとてもぎやかです。それは、ふたりのおばあちゃん、おばあちゃん、おとうさん、おかあさん、おねえちゃん、いもうと、そしてわたしの八にんでいっしょにくらしているからです。

まわりのひとには、「四せだいどうきよは、めずらしくとてもいいね。」と、いわれます。

ふたりのおばあちゃんは九十三さいです。うごくのはすぐゆっくりで、ころばないようにつえをもたせてあげて、からだをささえてあげます。ごはんをたべるのはじかんがかかるけど、みんなであつまっていっしょにたべるほうがたのしいし、ごはんがもとおいしくなるので、ゆつくりおはなししながらたべます。おやすみのひは、かぞくみんなでとらんぷをしたり、うたをうたったり、りはびりのれんしゅうをします。

かぞくみんなでいっしょになにかをするのはすごくたいへんだけど、どんなときもだれかひとりでもないとおもったらとてもかなしいきもちになるので、これからもずっとかぞくなかよくくらしたいです。

しょうがつこうでもみんなでなかよくするには、あいてがいやなきもちにならないようにすることがたいせつだとおもいます。

わたしのかぞくはたくさんいるので、みんなのきもちをかんがえて、や



さしくできることを、まいにちのせいかつでおぼえることができ、すごくいいことだとおもいます。

まわりのひとが、

「四せだいどうきよはとてもいいね。」

と、いつてくれたのは、このことだとわかって、とてもうれしいきもちになりました。

これからもかぞくみんなですとなかよくくらし、しょうがつこうでもみんなとなかよくできるように、やさしいきもちをわすれないようにしたいとおもいます。



# えれべーたーのつかいかた

半田市立乙川東小学校一年

加藤 李律

ほくには、二さいのいもうとと、一さいのおとうとがいます。

おとうとはまだあるけなくて、いもうともながいきよりはあるけなないので、べびーかーでかけることがよくあります。

おとうさんと、おかあさんと、ほくと、いもうとと、おとうとで、かいものに入ったとき、ほくはえれべーたーのぼたんをおすかかりです。

でも、えれべーたーにひとがのつていて、ほかにもまっているひとがいたときに、おかあさんが「こんでいるから、えすかれーたーでいこう」と、ほくとてをつないで、えすかれーたーにかえたことがあります。

そのとき、べびーかーにのつていたいもうととおとうとと、おとうさんはえれべーたーで、ほくとおかあさんは、えすかれーたーで一かいから二かいにいました。

えれべーたーはべんりだけど、ほんとうにひつようなひとがゆうせんしてつかえるように、おかあさんはえれべーたーにのらなかつたのです。

えすかれーたーはたいみんぐをあわせるのがいで、おかあさんにわらわれたけど、つぎはほくから、「えすかれーたーにしよう」といえるようにしたいとおもいました。

# 食べもののきぶではじまるたすけあい

長久手市立西小学校一年

田中 遥馬

ほくは五才までアメリカにすんでいました。そこでフードドライブという、地いきに根づいたとりくみにはじめてでえました。フードドライブとは、かていにあまつている食りようをもちより、食べるものにこまつている人にくばるかつどうです。ほくはこのかつどうをはじめて知ったとき、そのままだとゴミですてられてしまう食りようで、こまつている人を助けることができることに、なんていいかつどうなんだろうと思いました。また、フードロスへらすことによつて、ゴミがへり、人だけではなく、地きゆうもすくわれることに気づきました。

いっぽう日本では、フードドライブというかつどうは、少しずつ耳にするようにはなつたけれど、まだまだ根づいていないとかんじます。ほくのすんでいる市でもフードドライブがことしの七月からはじまりました。しかし、ほくのまわりでフードドライブというとりくみのことを知っている人は、ほとんどいません。

フードドライブをアメリカのように地いきに根づいたかつどうにしているには、どうしたらよいかな？とお母さんと話し合いました。するとお母さんは、

「まずはフードドライブというかつどうを、もつともつとおおぜいの人に知ってもらうひつようがあるんじゃないかな？」

と、言いました。ほくはそのために学校や会社、ショッピングモールなどたくさんの方があつまるばしょで、フードドライブのすばらしさを広



めるかどうかをふやすべきだと思います。もっと身近で、だれでもさんかできるボランティアかどうかとして、フードドライブが根づいていたらほくはうれしいです。また、ほくのいえではお母さんと月に一ど、パントリーをチェックして、おすわけできそうなものがあればきふしよとさめました。



## へアドネーション

大口町立大口北小学校二年

齋藤

滯

わたしは二〇二二年四月二十八日にはじめてのへアドネーションをしました。へアドネーションをやるうと思つたきつかけは、びよう気などかみが生えてこない人にかみをきふするボランティアがあることを知り、わたしもたすけたいと思つたからです。

きふするまで三年間かかりました。大へんだつたのは毎日のお手入れです。シャンプーやトリートメントをしたり、長い時間をかけてかわかしたり、かみはいつもみつあみをし、いたまないように気をつけながら一生けんめいのばしました。

いよいよびようしつでかみを切ることになったときはとてもドキドキしました。じ分で切つていいよ、とびようしさんに言われて、きんちようしながらハサミで切りました。うまくできてほつとしました。ふうとうにかみを入れて、このかみでウィッグをつくつてもらえるといいな、よろこんでもらえますように、とねがいながら、お手がみといっしょにおくりました。

へアドネーションをしてみても、人のたすけになれたような気がしてやつてみてよかつたと思ひました。これからもボランティアにさんかしていきたいと思ひます。



# どうしたらよろこんでくれるかな

春日井市立丸田小学校三年

長江 おう木

ぼくのばあちゃんは、ひとりで家にすんでいます。じいちゃんが天国に  
いってしまったからです。だから、ぼくたちがとなりの家にすんでお手つ  
だいをしてあげたりしています。

多くのばあちゃんは、足がふじゆうでつえや車いすをつかっています。  
でも、つえや車いすではのほれないかいだんやだんさんなど、家にひとりで  
いると、こまることがいっぱいあります。かいだんやだんさんは足を上げて  
いくのがたいへんです。こしやひざがいたいばあちゃんは、こけてけがを  
してしまったこともありました。だからぼくは、ばあちゃんの手をつない  
でゆっくり歩いてスピードをあわせたり、ばあちゃんがたすけてほしいと  
思っていることが何かないか、きいてあげたりします。ほかに、ばあち  
ゃんは、一人ぼっちでさびしかったり、お話ししてほしいのに自分ひとり  
だとおはなしできる人がいなくてかなしかったりしています。そんなとき  
は、ぼくの家にそうだんにきます。ぼくは、そんなばあちゃんをみて、「か  
なしそうだな。いっしょにどこかに行きたいのかな？さみしいから、おは  
なしをきいてほしいのかな。」と思って、ばあちゃんに絵をかいてプレゼ  
ントしたり、いっしょにお茶をのんだりします。ばあちゃんの元気がでる  
ようにしてあげたいからです。

前、東山動ぶつ園にはあちゃんといっしょに行ったときに、後ろから車  
いすをおしてあげたことがあります。そのときばあちゃんはぼくに車い  
すをおしてくれてありがとうね、といってくれました。とても、うれしそ



うでした。ぼくはありがとうを言われたときに心がはれてうれしくなりま  
した。

これからも、ばあちゃんがこまっているときは、同じようにたすけてあ  
げたり、はなしを聞いてあげたりして、ばあちゃんにうれしい気もちでい  
てほしいし、ほかにこまっている人がいるときは、その人もばあちゃん  
と同じようにたすけてあげたいです。

ぼくは、さいしょ「ふくし」と聞いても何か分からなかったけれど、こ  
うやって、みんなが気もちよく、元気にまいにちをすごしていけることが  
だいじなことだと思いました。



# デイサービスってなあに

清須市立桃栄小学校三年

澤村

えん

わたしのおばあちゃんは、くま本県にある「白百合デイサービスセンターいこい」ではたらいしています。おばあちゃんが「いこい」でおどっているところや、たん生日会のしゃしんが家にかざってあり、とても楽しそうだったので行ってみたいと思いました。

夏休みに、くま本に行くことになったので、おばあちゃんにおねがいして「いこい」を見学させてもらいました。中に入るとお年よりがたくさんいました。私のおばあちゃんよりもっと年上の方ばかりです。その日は、十五人くらいのお年よりがいたのですが、いつもより少ないそうです。レクリエーションをやっていたので、わたしもさんかしました。それは、体を動かすゲームで、やってみたらむずかしかったです。みんな楽しく遊んでいるように見えたけれど、少しいどうするだけでも、つえをついたり、スタッフに手をとってもらったりして歩いていました。耳も遠いみたいで、すぐ近くのスタッフの人はマイクを使って話していました。

次におふろを見せてもらいました。デイサービスにおふろがあるなんて知らなかったのでおどろきました。あちらこちらに、手すりや休けい用のいすがありました。それから、シャワーストレッチャーといういすにすわらせてもらいました。車いすのような形で、大きなきかいにガチャンとつなぐと、電動でよくそうの中に入りていきました。体が不自由な人がすわったままよくそうに入れるようになっていきます。足をのばして体をあらうこともできます。「いこい」でおふろに入る人は、スタッフの手伝いがひ

つような人がほとんどだそうです。シャワーストレッチャーにすわるのも大へんなのに、どうしておふろに入るのかふしぎに思いました。おばあちゃんに聞くと、家ではおふろに入るのがむずかしかったり、きけんなこともあったりするからだそうです。「いこい」にはプロのスタッフやせつびがあるので、安心しておふろに入れるのと、家族の人のふたんをへらすこともできるのだと知りました。

さいごに、お昼ごはんを見せてもらいました。レストランみたいな感じでした。一人ずつ名前のふだが立ててあり、名前の下に「一口大」や「スプーン」と書いてありました。また、一人一人に合わせて食べやすい大きさにカットして用意してありました。「いこい」には、お年よりが楽しくかいてきにすこせるくふうがたくさんありました。

わたしは「いこい」に行つて、お年よりには困つてることがたくさんあることが分かりました。わたしたちがあたり前にできることでも、お年よりにとつては大へんなことがあるのです。わたしには百二十才のひいおばあちゃんがありますが、今はコロナで会えません。会えるようになったら、困つていることを聞いて、たくさんお手伝いしてあげたいです。





# みんなの笑顔

江南市立宮田小学校 四年

平野 貴也

ぼくは、夏休みにお母さんの仕事について行き、重い障がいをもった子に会いました。お母さんは理学りよう法士で、そこでは遊びながら障がいをもった子のリハビリをしていました。

重い障がいのある子は言葉が話せず、手や足も上手に動かさません。自由に動けないと、やりたい事ができなくて、とても大変だなと思いました。自分たちが、いつも当たり前のようにやっている、立ったり歩いたりする事が、障がいをもっている子にとっては、とてもむずかしいという事が分かりました。

障がいをもっている子もぼくたちと同じように表じようはとてもゆたかでした。うれしい時はニコッと笑ったり、怒っている時は大声を出しながら、こわい目つきで伝えたり、いろいろな表じようがありました。言葉で上手く伝えられない分、表じようでがんばって相手に気持ちを伝えようとしていたのかなと思いました。

障がいにはいろいろなしゅるいがあると教えてもらいました。ぼくたちと見た目や生活はあまり変わらないけれども、目や耳、脳や心ぞうなどに障がいがある子もいれば、手足が全く動かさなくて、ねたまま生活している子もいるそうです。

障がいのある子のほとんどは、特別支えん学校というところに通っている。



ることを知りました。ぼくは、障がいをもっている子も、ぼくたちと同じ学校に通ってほしいと思います。どうしてかというのと、同じ学校に通えば、ぼくたちは、障がいの事を知る事ができると思うし、障がいをもっている子も、ぼくたちとしゃべったり遊んだりする事で、コミュニケーションをとれるようになると思っただからです。

ぼくは、しように来、理学りよう法士になって障がいをもっている子たちが楽しくすごせるようにお手伝いをしたいと思います。ぼくが会ってきた子たちのような幸せな笑顔に、たくさんの子たちがなってくれるといいです。

# 手話はじめてもすてきな言葉

新城市立千郷小学校四年

中西 柚乃

わたしは今まで、障がいのある人とほとんど合う機会がありませんでした。昨年の秋、ふとテレビで見た「手話」の動きにきょうみをもち、もつと知りたい、使ってみたいと思いました。クリスマスプレゼントに、手話の本を買ってもらったことが、わたしと手話の出会いになりました。

本を見ながら手話を覚えていくうちに、実際に手話を使ってみたくて強く思いました。四年生に進級したころ、お母さんに手話体験ができる所を探してもらいました。

お母さんが探してくれた手話教室には、耳が全く聞こえないお兄さんと、生まれつきの重度難聴だけれども補助器を付ければ少し聞き取ることができて、口の動きを見て声に出してお話もできるお姉さんと、耳の聞こえるお姉さんの三人がいました。

わたしは、本を見て覚えた手話を使って自己紹介をしました。お兄さんとお姉さんは、普段の生活で使える手話だけでなく、手話の成り立ちについても教えてくれました。

手話や指文字は、物からイメージされているものが多いそうです。「ほ」はヨットの帆の形から、「ゆ」は温泉から立ちのぼる湯気からイメージされたようです。手話の成り立ちも、とても面白いと思いました。

手話を教えてもらうときは、マスクを外して行きました。理由は、手話は手の動きだけでなく、口の動きや表情も大切な情報になるからです。耳が聞こえる人は、相手の声の様子から「面白い」や「悲しい」などといっ

た感情を理解します。耳が聞こえない人は、顔の表情を読み取って理解するそうです。コロナ禍でのマスク生活は、耳が聞こえない人たちは、わたしたちよりも多くの不便さを感じているだろうなと思いました。

手話体験をしていて、驚いたことがありました。日本語に方言があるように、手話にも方言があり、全国共通ではないことです。

わたしに手話を教えてくれたお兄さんとお姉さんは、出身地がちがいました。お兄さんは九州地方出身で、お姉さんは愛知県出身でした。二人が出会ったころは、通じない手話がいくつかあったそうです。わたしが教えてもらった名前を意味する手話も、愛知県出身のお姉さんは、手の平に親指を押し当てていました。一方、九州出身のお兄さんは、左むねの前に、親指と人差し指で輪を作るしぐさをしていました。手話の世界もとても奥が深いことを知り、もつともつと手話を知りたくくなりました。

すてきなお話も聞きました。お兄さんとお姉さんは、オートバイで旅行に行くことが好きなのだそうです。わたしはびっくりして、「耳が聞こえないのに、どうやって旅行するの。音が聞こえなくて、あぶくないの。」と質問しました。すると、お姉さんが、

「あぶないなんて、考えたこともなかったよ。わたしは耳が聞こえないけれど、それを障がいとは思っていないし、自分のやりたいことをやっているだけだよ。」

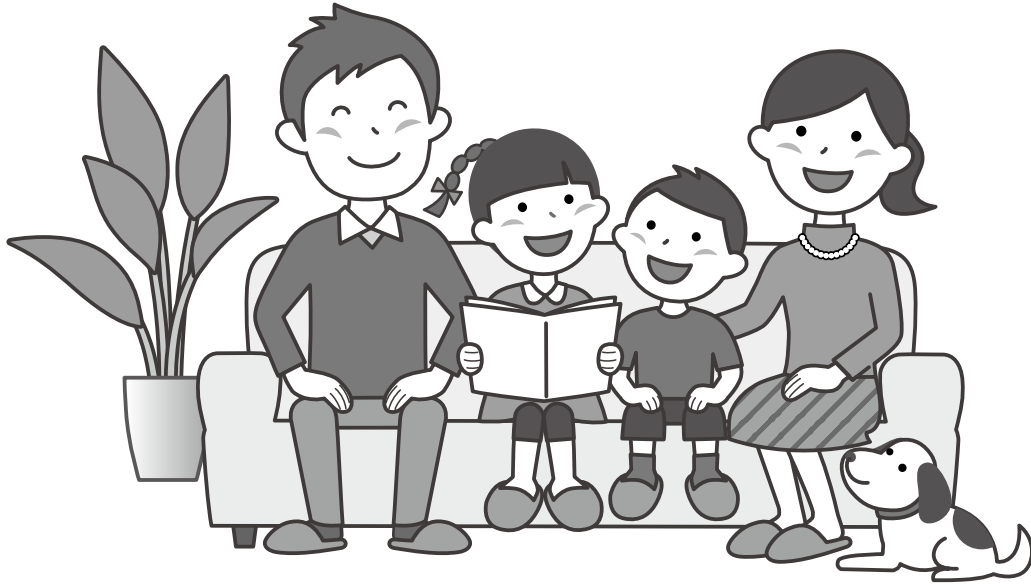
と、笑いながら答えてくれました。

わたしは、耳が聞こえないことは、日常生活を送るのも不便だし、人とコミュニケーションを取るのも難しいと思っていました。耳が聞こえていても、少し不安なことがあると、出来ない理由を探してしまう自分がいるからです。もし、自分の耳が聞こえなかったら、もつともつと不安になると思うからです。しかし、お姉さんの話を聞いて、やりたいことは進んで挑戦しようという勇気ももらいました。

このように、わたしは、実際に手話を使って生活している人と話をすることで、障がいに対するイメージが大きく変わりました。手話を学ぶこと



で、コミュニケーションを取れる人がふえたことはうれしいし、楽しいです。手の動きや表情で気持ちが通じ合える手話は、とてもすてきな言葉だと思いました。



# ぼくの大好きなお父さん

知多市立旭南小学校四年

竹内 桜人

ぼくのお父さんは耳が聞こえません。ほちよう器をつけていますが、大きな声でも聞こえないことがあります。お父さんは人の口の動きを見て言葉を読み取ることができます。しかし新がたコロナウイルスの感せんがはやり、みんながマスクをするようになったため、話している人の口の動きを見ることができなくなっていました。

「人の口が見えなくて困るな。」

とお父さんが話していました。耳が聞こえないからそもそも聞き間ちがえることがあったのに、今はマスクで口がかくれていて何を言っているのか分からないそうです。ぼくがお父さんとマスクなしで話す時も伝わらないことが多くて、お父さんと話す時は時間がかかります。

ぼくは聞こえないお父さんをいやだとは思ったことはありません。それにお父さんがかわいそうだと思つたこともありません。なぜかと言うと、お父さんには好きなことがあるからです。ぼくとお父さんはけん道をやっていて、ぼくが通っているけん道教室のほかにもお父さんは週に五回くらいけん道教室に通っています。お父さんはけん道が大好きで、けん道教室の子ども達にアドバイスすることもあります。今は三だんを取ることを目指しています。

小学校の福祉実せん教室で目の見えない人が点字や目の見えない人のくらしを教えてくださいました。「しょうがい者の人は大変だろうな」と心配していました。話をしてくれた人はポジティブでとても楽しそうでした。



「大変だろうな」とばくが勝手に思いこんでいたことに気づきました。耳の聞こえないお父さんや福し実せん教室の目の見えない人が困っていたら助けられる人になりたいと思うけど、けん道を子ども達に教えたり、福し実せん教室で点字を伝えてくれたり、お父さんや目の見えない人は助けられるばかりではないんだなと思いました。おたがいに助け合っていたらいいなと思いました。



## 私にできる福祉活動

弥富市立十四山東部小学校四年

伊藤 愛葉

私は生まれた時から、かみの毛をのばしていました。小学一年生になって、プールが始まる前にかみの毛を切るようになりました。その時に初めてヘアドネーションという福祉活動を知りました。

ヘアドネーションとは、小児がんや先天性のだつ毛しよう、事故などで頭はつを、失った子どものために、きふされたかみの毛でウィッグ（かつら）を作り、無料でていきようする福祉活動です。そして今年の夏、三年間のぼしてきたかみの毛を切る時に、今回もヘアドネーションをすることにしました。

その時に、初めて小児がんで苦しんでいる子ども達の写真を見ました。その写真の子ども達は、強い薬のえいきようでかみの毛がなくなってしまうことを知りました。そこで私は、もう少しわしく調べました。

国内では、年間約二千五百人が、小児がんにかかっていることを知りましました。こんなにたくさんの子どものが、がんとたたかっていることにおどろきました。その中で一人の女の子のとう病生活のビデオを見ました。その女の子は、温泉がとても大好きな子で、とつ然病気になる、五才で亡くなりました。亡くなる四日前に、家族と温泉旅行に行きました。しかし女の子は、大好きな温泉に最後の日まで入ろうとしませんでした。私は、どうして入らないのか考えました。それは、他人に自分の体や頭を見られたくなかったのではないかなと思います。もし私とその女の子だったら、やせた体で、かみの毛がない自分を知らない人達に見られたくないと思いま



す。

病気になる時、見た目のせいで自分に自信が持てなくなって、やりた  
いこともやれないと思うと悲しくなりました。ヘアドネーションをして  
も、病気はなおりません。でも、苦しんでいる子に、自信を持たせること  
ができると思います。だから私は、ヘアドネーションをこれからも続けた  
いです。一人でも多く、あきらめずに病気とたたかってほしいです。

この他にも、私が取り組んだことがある福祉活動は、地いきの清そう活  
動です。

近所の人達と協力して、ごみ拾いや近くの神社のそうじをします。これ  
をすることで、地いきの道や神社の草などが少なくなり、きれいになりま  
す。きれいにするだけではなくて、あいさつやお話をするので、お年よ  
りの健康じょうたいをかくにんできる大切な場です。近所のおばあちゃん  
は、私にうれしそうな顔で話してくれます。私も元気そうなおばあちゃん  
とお話するのが楽しいです。

私にできる福祉活動は大きくないけれど、だれか一人でも自信を持たせ  
たり、よろこばせたりできる小さな活動です。私は、これを続けていくこ  
とが大切だと思います。

また、すれちがったお年よりにあいさつをしたり、プルタブ回しゆうを  
行ったり、私ができる新しい活動にチャレンジしていきます。



# 「手話講習会に参加して感じたこと」

豊橋市立幸小学校五年

舟田 佳叶

学校で夏休み前に「手話体験講習会」手話ってなあに？という手紙  
をもらい、授業でも、ちょうど福祉体験で車いすやアイマスクをつけて歩  
いたり、点字体験をしました。

私が手話を知ったのは、ユーチューブで有名人が基的な手話をやって  
いたのをみて、「手話ってどうやるの？」「私も覚えたい」「やってみたい」  
と思ったのが、きっかけです。

母から「ちょうど夏休み中だから、講習会で体験してみない？」と言わ  
れ、母も一緒に行ってくれるなら安心だと思っただけで参加を決めました。

講習会では、耳が聞こえない先生が毎日の生活の様子を私たちに教えて  
くれました。

音が聞こえないので、お客さんが家に来た時や朝起きる時には、光やし  
ん動で知らせてもらうこと、テレビをみる時には、文字が流れる字まくと  
いうものがあり、テレビリモコンにボタンがあると教えてくれたので、家  
で確にんして、はじめておしてみました。

私たちは、音と文字両方で情報が分かるので、よいですが、耳の聞こえ  
ない人たちは、表示される文字だけで理解しないといけないので、様子が  
くわしく伝わっているのかなあと思いました。

耳の聞こえない先生は、今はスマホやスマートウォッチがあるから、昔  
よりは便利になったと言っていました。耳が聞こえなくて今でも生活で  
困っていること、大変なことがあると教えてくれました。



仕事のいそがしい時には、紙に書いて伝える筆談ひつだんという伝え方は、毎回  
はむずかしい方法なので、口話こうわといって口の形をみて言葉を伝える方法が  
多いようですが、読みまちがう事もあるので、ミスをしてしまうこともあ  
り、困こまると言っていました。

今は、マスクの生活をしているので、口の動きが見えなくて顔の表情も  
わからないので話がわからないこともあり、マスク生活は、私たちとはち  
がう大変さがあると思いました。

耳の聞こえない先生の話を聞いて、紙に書いたり、身ぶりで伝えること  
もできるけど、手話を使って伝えた方が耳の聞こえない人たちには伝わり  
やすいと思いました。

講習会では、かんたんあいさつや「覚える」「忘れる」わすなどの単語も  
教えてもらいました。

手話は顔の表情を変えることで相手に正しく伝わるそうです。

たとえば、「わからない」と伝える時には、手話で表すのといっしょに、  
わからないような顔をする。「わかる」と伝える時には、わかったような  
表情をすることが、とても大切だと教えてくれました。

耳の聞こえない先生と覚えなければかりの手話を使って私の手話が伝わった  
時、聞こえる人も聞こえない人も同じように会話ができるんだ！と、うれ  
しい気持ちになりました。

学校で、国語や英語と同じように、手話の授業じゆぎょうを取り入れてもらえた  
ら、私たちが手話を覚えて、耳の聞こえない人たちと、もっとたくさん  
話ができ、耳の聞こえない人たちがこまることも少なくなるのかなあと  
思います。

手話講習会で、たくさん資料をもらったので、これから少しずつ手話  
について知りたいと思いました。

## 福祉は人のためならず

弥富市立栄南小学校五年

加藤 里緒菜

「福祉」ってなんだろう。夏休みの宿題で福祉の作文を書くことになっ  
て、私が最初に思ったことです。スマートフォンで検索しようとすると、「しあ  
わせ」また、「人々の幸福で安定した生活を公的に達成しようとすること」  
と出てきました。むずかしくて、やっぱりよく分かりませんでした。だか  
ら、お母さんに聞いてみました。それで、なんとなく分かりましたが、周りの人た  
ちをしあわせにする事なのか分かりました。自分のことだけで精いっ  
ぱいなのに、人をしあわせにするなんて私にはハードルが高いなあと思  
いました。でも、まずは身の回りだけかのためかやっていることをさがし  
てみました。

最初に思いついたことは、元気の無さそうな友達に声をかけたり、こま  
っている友達を助けたりすることです。どちらも友達のためにやっている  
ことですが、みんなが楽しいと私もうれしいので、私のためでもあります。  
そうやって考えていくと、ふだん何気なくやっていることが福祉で、  
それはめぐりめぐって自分のためになっているのかもしれないということ  
に気がつきました。

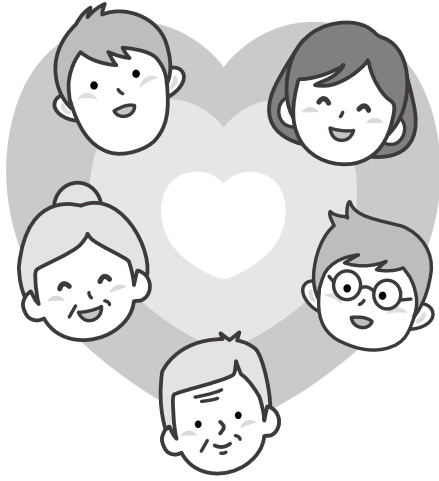
例えば、コロナ対さくのマスクや手洗い、うがいもそうです。私感せ  
んしてしまうと、おじいちゃんやおばあちゃんに移してしまうかもしれな  
いので、おじいちゃんたちのために、気を付けています。でも、おじいち  
ゃんたちが元気だとうれしいし、もちろん私もコロナにかかりたくないの  
で、自分のためでもあります。



今回福祉について考えてみて、福祉は正義の味方やスーパーヒーローじゃなくても、だれにでもできることだというのが分かりました。遠くのしん災のボランティア活動や、知らない人を助けたりするのはハードルがものすごく高いですが、ふだんの生活の中の自分の手がとどくはん囲のことなら私にもできそうな気がします。もしも、地球上のすべての人々が自分たちの手のとどくはん囲から福祉を始めていけば、いつかは世界のすべての人をしあわせにすることができるかもしれません。

そして、人のためにも思って行動したことはめぐりめぐって自分のためにもなります。この話をお母さんとしてみたら、「情けは人のためならず」という言葉を教えてくださいました。人に親切にすれば、その相手のためになるだけでなく、やがてはよい報いとなって自分にもどってくる、という意味です。よく間違って、親切にするのはその人のためにならないと覚えている人も多いということも教えてもらいました。

お母さんの話を聞いて、私は「福祉は人のためならず」だなどと思いました。これからも無理せず、できるはん囲で私なりの福祉を世界のためにも、私のためにもがんばりたいです。



# 耳の不自由な方の大変さを知って

豊川市立赤坂小学校 六年

野澤 葵真

私はバスケットが大好きです。自分がバスケットをするのも好きですが、プロの試合を見るのも好きです。私が応援している三遠ネオフェニックスというチームに津屋一球という選手がいます。津屋選手は、生まれつき難聴で補聴器をつけなければ周りの音を聞き取ることが難しいそうです。私は「耳の不自由な人は、健常者のように人の声を耳で聞いて会話をすることができないから、コミュニケーションをとるのが大変そうだ」というイメージをもっていたので、声を出し合ってボールを選び得点をとるバスケットでプロとして活やくしていることに驚きました。そんなとき、学校の行事として行われた福祉実践教室で福祉体験をする話を聞きました。津屋選手のことになった私にはまよわず手話の講座を選びました。手話を教えてくださった講師の方は、耳の不自由な方でした。講師の方が手話でお話しをし、通訳の人が言葉で私たちに伝えてくださいます。耳の不自由な方のコミュニケーションをとる方法は六つ。口話、身振り、空書き、指文字、手話、紙に書いて伝える方法があるそうです。手話という方法しか知らなかったので、耳の不自由な人が周りの人に自分の気持ちを伝える方法がたくさんあることを知り、驚きました。

まずは身振りというジェスチャーで物の名前を伝えるという体験をしました。簡単な動作のものは、すぐに相手に分かってもらうことができましたけれど、ジュースやお茶など似ているものは同じ動作になってしまい、うまく相手に伝えることができませんでした。これではスーパーマーケットな

どで、自分がほしいものではないものに勘違いされ、別の所に案内されてしまうかもしれません。耳の不自由な方の苦労や大変さを実感しました。

次に手話を教えていただきました。あいさつをするときの手話は、手を動かす向きが違ったり動かす手が逆だったりすると意味が違ってしまうそうです。手話は正しく覚えて正しく使わなくてはいけないのだとわかりました。だから私は講師の方の手をよく見て、間違えないように気をつけながらまねをしました。そうしたら、私の手話が講師の方に通じたようで手話で返事を返してくださいました。言葉が通じることがこんなにもうれしいことだとは思いませんでした。

最後に、自分の名前の手話を一人ずつ教えていただきました。私の苗字「のざわ」の手話ができるようになったとき、とてもうれしくて、手話の講座ではない友達や家族に何度もやってみせました。

「そっやって表すんだ。すごいね。」

と言ってもらい、とてもうれしかったです。今までにニュースなどで手話をしている人を何度も見たことがあります。全部の言葉を覚えるのは大変そうだなと思っていただけ、物の形や指文字を組み合わせて作ってあって楽しく手話を学ぶことができました。

福祉実践教室の手話体験を通して、今まであまり深く考えたことがなかった、耳の不自由な方の苦労や大変さに少しだけ触れることができました。三遠ネオフェニックスの津屋選手も講師の先生も、見た目は私たち健常者と同じで、町を歩いたり買い物したり普通の生活をしています。自分が気づいていないところで耳の不自由な方とすれ違っていたのかもしれない。今回の体験で、正しく伝えることも大切だけど、聞く側も相手の伝えたいことを分かっていう気持ちをもつことが大切だと学びました。耳の不自由な方に限らず、どこかで困っている人を見かけたら、勇気を出して自分から声をかけられる人になりたいです。

## むずかしくない「ボランティア」

大口町立大口北小学校六年

渡邊 絢太

テレビを見ていると、日本の各地で起きている災害のニュースを目にします。この夏休み中も東北での大雨災害がありました。大きな災害の際、必ずと言っていい程耳にするのは「災害ボランティア」という言葉です。暑い夏の日ざしの下、大雨で被害を受けた地域で、がれきや土砂のてっ去作業をする人の姿が映るニュースを、ぼくは、

「ボランティアをする人ってすごいな、ぼくにはマネできないな。」

と見て見えていました。家族でそのニュースを見ていたので、ぼくが思った事を言うと、お母さんに

「ボランティアって一言で言っても色々な形があるんじゃない？災害ボランティアは確かに危険も多くて子どもには難しいかもしれないけれど、この間タイガースでやった清掃活動だって立派なボランティア活動だと思うよ。」

と言われました。

ぼくの入っている野球チーム・タイガースでは、毎年、学校付近のゴミ拾いや草取りなどの清掃活動を行なっています。いつも校庭を練習で使わせてもらっている感謝の思いをこめて、団員やコーチ達と取り組んでいます。その活動は学校のホームページにも紹介された事があり、「ありがとう」とお礼の言葉と共にけいさいされているのを見た時は、うれしいような少しはずかしいような気持ちになりました。

お母さんに言われるまで、清掃活動を「ボランティア」として意識した



事はなかったけれど、自分達のした事をだれかが喜んでくれているのだとしたら、そんなのかもしれないと思えたのです。だとすると「ボランティア」というものはぼくが思っていたより、ずっと身近で、だれにでもできるものなのかもしれません。テレビの中にうつる「ボランティア」の人は、ぼくとは遠くかけはなれた立派な存在に見えたけれど、ぼくでもできる「ボランティア」は探せばいくつもある気がしてきました。

「ボランティア」は、そんなに難しい事ではなく、困っている人に、今、自分のできる事を無理ないはんで力をわけ合う事なのだと気づきました。

今のぼくにできる事はまだまだ小さな事だけれど、その時その時自分の持つ力を必要としている人に、少しでもわけられる人になりたいと思いました。みんながそう思える世の中になれば、その小さな力も大きな力へ変わるはずだと思います。

## 介護について

幸田町立幸田小学校六年

三浦 真菜

私のおおばあちゃんは九十八歳です。おじいちゃん、おばあちゃんと今も一緒に暮らしています。介護者であるおじいちゃんは七十三歳です。おじいちゃんも高齢なので、おおばあちゃんの介護が大変な時があるみたいです。おじいちゃんと同じ年れいで施設に入っている人もいると聞きました。だけど、おじいちゃんは、元気でいなければいけないとも言っています。それは、おおばあちゃんが死ぬまでは世話をしなければいけないため、死ぬわけにはいかなからだそうです。それを聞いて、なんだかとても複雑な気持ちになりました。おおばあちゃんには長生きをしてほしいと思っているのに、おじいちゃんは介護中心の生活になっていて、介護が重荷で、辛そうに思えたからです。

三年前に、もう一人のおおばあちゃんが亡くなりました。おおばあちゃん、五年くらい施設に入っていました。私がお見舞いに行くとも喜んでくれました。けれど、おおばあちゃんは突然、私のことが分からなくなる時がありました。また、話していても同じ話を何度も何度も繰り返すことがありました。それでも楽しかったです。ただ、お母さんに

「いつになったら家に帰れるの?」

と何度も何度も悲しそうに聞いていたことは、三年たった今でも私の頭にずっと残っています。なぜ家に帰れないのだろうと思ったこともありました。

施設での生活を見ると、介護士さんはすごいと思うことがたくさん



んありました。何度も同じ話をするおおばあちゃんに嫌な顔をするのもなく会話をずっとしていることです。また、食事の時間も、一人ではなく複数の人を同時に食べさせていました。私はおおばあちゃんにご飯を食べさせるだけでもとても大変でした。突然トイレに行く人、怒り出す人、席を立て歩く人もいました。介護士の仕事は休む暇がないと思いました。介護士の仕事は大変だということはわかっていましたが、福祉体験をしているときにふと思ったことがあります。私が介護をしたのは限られた時間だけでした。介護士も時間は長いけれども、交代することができます。ところが、家で介護をしているおじいちゃん、おばあちゃんは、ずっとおばあちゃんのことを気にかけていないといけません。施設にいたおおばあちゃんは、家に何度も救急車を呼んだことがあります。悲しいけれどおばあちゃんは、家に帰ることができなかった理由が分かった気がしました。

二人のおおばあちゃんを見てみると、長生きすることは本来であれば喜ばしいことなのに、純粹に喜べないことがあると思いました。これは高齢者に限らず、体に障害のある人にも当てはまると思います。障害があることで常に介護を必要としている人がいます。そこには、介護者が必ず存在します。介護する側、介護される側ともに幸せになる方法は、家族といった当事者だけではなく社会全体で考えていく必要があると思います。私もいずれは高齢者となります。そのころには、今以上に高齢社会になっていくはずだと思います。介護する人よりも、介護されるの方が圧倒的に多くなっていると思います。介護問題については、これからも身近な問題として考えていきたいと思いました。





# それぞれの普通



半田市立亀崎中学校一年  
佐藤 保仁

僕は、放課後デイに行っている。そこには、大きな声が苦手な子や大きな声でさげふ子や机の上に乗る子などいろいろな子たちがいる。だけど、今、普通じゃないと思った人はいるかもしれない。だったら、普通って一体何？大きな声が得意だったら普通、小さな声でさげんだったら普通、机に乗らないなら普通、いけないことしなければ普通、周りと同じだったら普通、それなら普通の意味を調べてみた。インターネットで調べたら、いつ、どこにでもあるような、ありふれたものであること。他と特に異なる性質を持つてはいないさま。とかいてあった。国語辞典には、他と比べて、とくに変わっていないことと書いてあった。ということは、周りと比べて変わっているから、普通じゃないということになるかな。僕は、体を動かすことは嫌いじゃないけど、走るのもおそいし、自転車にも乗れないし、とびばこもとべない。話すのは好きだけど、覚えることが苦手で漢字などいろいろなことを覚えるのにみんなよりたくさん時間かかるし、がんばって覚えてもすぐにわすれちゃうこともある。たぶん、他の人から見たらかわってるし普通じゃないかもしれないけど、僕はそんなに気にしてないし、普通だと思っっている。人それぞれ普通はちがうものだと思う。普通じゃなきゃいけないのかな。

僕は、放課後デイでいつもともだちと楽しい時間をすごしている。いっ

しよに運動やべんきょうしたり、工作したり、お出かけしたりする。いろいろな普通の子たちといっしょにやるから驚くこともあるけどみんなやさしいし、みんな一生懸命がんばっているから僕もがんばれるし大好きな場所だ。年もちがうし、できることもちがう友だちだから、たすけたり、たすけられていると思う。

ちよつと前、放課後デイで友だちが僕に、ちよつかいをだしてきて少しこまったことがあった。前の僕だったら、いじわるする子はきらいになるし、いっしょにいないようにしていた。だけど放課後デイでその子も他の子と一生懸命にがんばっている所を知っているから、何か理由があつてその子も僕にちよつかいを出さんだろうなと思えるようになった。だから、そのあとも話すようになった。

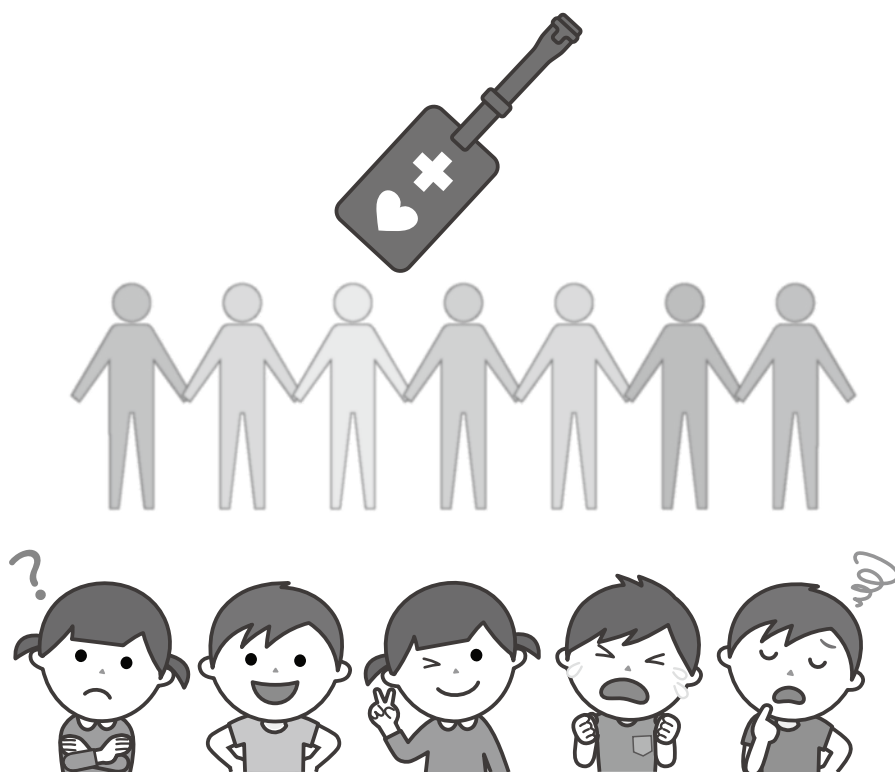
一つでも自分とちがう所があると、変とか普通じゃないと決めつけて、それ以上関わらない人や近よらない人もいる。僕は、それはあまりよくないことだと思う。自分とちがうというある一部分だけで決めつけてはいけないと思う。もしかして、なにか困っているかもしれない。助けてほしいかも知れない。そんなことに、気づいてくれる人が増えるといいなと思う。

ヘルプマークを知っていますか？赤いはいけいに十字の下にハートがついている。マークです。僕の友だちも何人か持っています。えんじよやはいりよを必要としていることが外見からは、分からない人が、周りの人にはいりよを必要としていることを知らせることで、えんじよを得やすくなるように作られたマークです。これによってまわりの人が電車やバスで席をゆずりやすくなったり、「何かできることはありませんか」といったえんじよのための声がけがしやすくなります。見た目ではわからないけど、困った時に、自分の症状をうまく説明できなかつたりする。僕もそうだけだと知らない人には、困ってます、助けてくださいとははずかしくて言えないと思います。まだ、ヘルプマークを知っている人たちは少ないです。ヘルプマークを知ってもらうことは困っている人をみんな助けあう社会を実



現することにつながっている。少しでもたくさんの人にヘルプマークのそんざいを知ってほしいです。

福祉というのは、人を思うなげないやさしさではじまるのだと思います。変だね、かわいそう、普通じゃないと言う前に困っている人に声をかけてくれる人が増えてくれるとうれしい気持ちになります。



## 小さな勇気

碧南市立南中学校一年

奥田 萼花

「おじいちゃん、歩けないの。」

私が道を歩いていたらそんな言葉が聞こえてきた。見ると、車椅子に乗ったおじいさんを、五才くらいの男の子が見つめていた。するとおじいさんは微笑みながら男の子に、

「おじいちゃんね、足腰が弱くてうまく歩けないから車椅子でお散歩してるんだよ。」

と言った。すると、男の子のお母さんが慌てて男の子をしかった。

「そんなにしからなくてください。この子は何も悪いことをしていないんですから。」

おじいさんはそう言った。

家に帰っても、私はおじいさんの言っていた、

「何も悪いことをしていないんですから。」

という言葉が、頭に残っていた。どうしておじいさんは、そんなことを言ったのだろう。私には、男の子が言った言葉は失礼としか思えなかった。

そんなときに、学校で福祉実践教室があった。そこで、視覚障害者の方がこんな話をしてくれた。

「小さな子どもが、障害のことをたずねたときに、親が子どもものごとをしかると、子どもは、これは聞いてはだめなことなんだと思い、同時に、障害者はかわいそうな人だと思ってしまいます。」

この話を聞いたとき、私は確かに障害者をかわいそうな人だ、と  
思っていたことに気付かされた。また私はこうも思った。障害のある  
人との間に壁を作っているのはこの考え方なのではないのだろうか、  
と。

この壁を壊すためには、私たちが、「障害者はかわいそう」とい  
う考えを捨てなければならぬと思った。

そこで私はなぜ今まで障害者をかわいそうな人だと思ってい  
たのか考えてみることにした。

私が障害者の方をかわいそうだと思っていた一番の理由は、私  
にとって、あたり前のことをすることができないからだ。

では、私にとつてのあたり前とは何なんだろう。歩ける、話  
せる、耳が聞こえる、目がみえる、私にとってはあたり前のこと  
でも、それがあたり前でない人もいる。そう、あくまでもこれ  
は、私にとつてのあたり前で、一人一人あたり前はちがう。

自分とつてのあたり前を人に押しつけて、勝手に同情する、  
かわいそうだと思う、それこそが、一番失礼なことなのではないだ  
ろうか。私は、今までの自分の考え方を心から反省した。

これからは、障害も、その人の個性の一つとして認めてい  
きたいと思つた。

また、町で困っている人がいたら、積極的に声をかけたい。  
でも、声をかけるときはすぐく勇氣がある。相手に拒否される  
かもしれない。相手にとって迷惑かもしれない。だけど拒否  
されるほうが何もできずに後悔するよりずっといいと思  
つた。

これは別に障害のある方だけに限ることではない。小さい  
子や高齢者、重い荷物を持っている人、怪我をしている人、  
様々な人にあてはまる。

私は、困っている人がいたら、どんな人でも助けられる  
ような人になりたいと思つた。だって、困っている人がいたら全力で助けられる、  
そんな人が一番かっこいい人だと思うから。

私をふくめたたくさんの方が、この町で、この国で、この  
世界で暮らしている。

この世界で暮らすだけでも、普段の暮らしの幸せを感じ  
られる、そんな日は来るだろうか。

一人一人の小さな勇氣が、絡み合ったり、反発し合っ  
たりして、未来へ踏み出す大きな力へと変わる。

だから私は、少しだけ、勇氣を出してみようと思  
う。私の小さな勇氣で、世界を変えることは難しいか  
もしれないけど、まずは自分の周りから、少しずつでも  
変えていきたいと思う。

そしていつの日か、だれもが心から幸せだと感じら  
れるような世界になることを願っている。

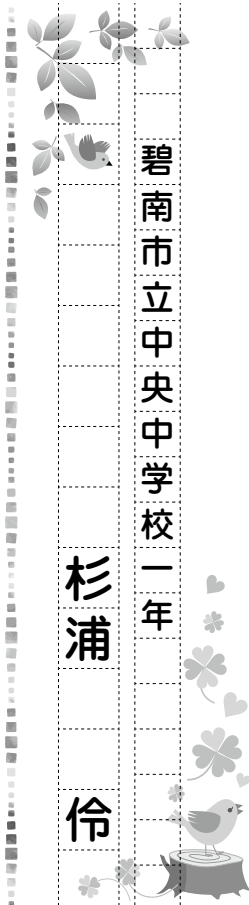


# 考えが変わった福祉実践教室

碧南市立中央中学校一年

杉浦

伶



僕は、学校の総合の時間、福祉実践教室に参加し、要約筆記と視覚障がい者ガイドを体験しました。

要約筆記は初めてなのでどんなものなのだろうと思い、福祉実践教室の前に少し調べてみました。要約筆記とは、聴覚障がい者への情報共有手段の一つで、話されている内容を要約し、文字として伝えることだとわかりました。僕は、聴覚に障がいをもっている人は、手話でコミュニケーションをとっていると思うのですが、実際に手話を第一言語にされている方は二割もないことを知り、とても驚きました。耳が聞こえにくい、聞こえないという人の中には、中途失聴者という人がいて、その人たちは生きていく中でだんだんと耳が聞こえにくくなってしまおうそうです。そうした中途失聴者の多くは、手話よりも要約筆記に頼って生活していることを初めて知りました。また、要約筆記には「速く、正確に、読みやすく、私感を含めず、秘密を守る」という基本があり、とても難しそうだなと思いました。

福祉実践教室の日がやってきました。講師の方は、OHP要約筆記というやり方で、オーバードプロジェクタという表示システムを使って、ロールという巻物状のOHPシートにフェルトペンで文字を書き、それをスクリーンに映し出すことをしていました。実際に要約筆記をやってみると、緊張してしまい、一回聞いただけではほぼ何も頭に入りませんでした。さらに、その話を要約する力も必要で、長い時間かかってもうまく書けず、

想像していた以上に難しく苦戦しました。要約筆記の方は短時間で的確に伝えることができるので、すごいなあと感心しました。講師さんの字がとても丁寧で見やすく、そういうところも大切なのだなあと思いました。

視覚障がい者ガイドでは、二人一組になり、目隠しをしてペアの人と腕を組んで学校の中を歩きました。階段ではペアの人に声をかけてもらってもとても怖くて、目が見えないということは大変なことなのだなあと改めて思いました。

この福祉実践教室での体験で、僕は、障がいをもっている人に対する考え方が変わりました。もともとは、障がいをもっている人は生活をしていくのが難しく、苦勞をたくさんしているイメージだったのですが、福祉実践教室を体験してみたら、その人なりに自分に合った生活をしていて、障がいがあってもいきいきと輝いて生きていることを知りました。講師の先生はとても明るくて、僕の抱いていたイメージとは全く違いました。

「挨拶をしてくれるとうれしいから、皆さんも挨拶してね。」という言葉がとても印象的でした。変に気を遣わずに普通に挨拶をするだけで、相手はうれしくなるのだとわかりました。人はそれぞれ違っていて、たとえ障がいをもっていても、健常者と同じように接することが大切だと思いました。

それから、もし障がいがあつて困っている人がいたら、ちゅうちょせず助けてあげたいと思うようになりました。でも困っている人を助けるといふのは、障がいのあるなしに関係ないことだと思うので、日頃からどんな人にも温かい気持ちで接するように意識して行動していきたいです。最初の声かけが勇気のいることだと感じます。今までの自分は少し人見知りだし、格好つけていると思われるのも少し恥ずかしいので、なかなか手助けができませんでした。これからは頑張つて話しかけて、困っていなかったらそれでいいし、困っていたら進んで助ける側になりたいです。また、ボランティア活動に積極的に参加して、いろいろな人と関わっていきたい



です。

今回の福祉実践教室で体験したことを家族に話してみたら、「人は、老化で目も耳も機能が低下するんだよ。」

と言われました。それを聞いて、視覚や聴覚の障がいは、特別なものではないのかも改めて思いました。

僕は、障がいのあるなしに関わらず、どんな人にも温かい気持ちで接し、明るく話せるようになりたいと思います。コミュニケーション能力を高め、自分を磨いていきたいと思っています。

## 自閉症を知る

弥富市立弥富北中学校一年

永久 桜輔

ほくのいとこR君は自閉症です。「自閉症」とは、自閉スペクトラム症といい、対人関係、人と話すことが苦手、強いこだわりがあるといった特徴を持つ、発達障害の一つです。自閉症といっても、それぞれ人によって特徴が違います。R君の日常生活は、健常者とほとんど変わりません。だけど嫌な事があった時や、悲しい事があった時は、おこって、場所関係無しに大きな声でさげんでしまったり、泣いて自分の頭を思いっきり強くだたいたりしてしまうことがあります。同じ年の子と比べてしまうと出来ないことが多くあって、幼い部分もあります。でも、R君なりに成長しています。

ほくは、時々R君とお風呂に入ることがあります。一緒に入るといいうよりは、洗ってあげたり、ふいてあげたりとお世話する感じですが。この間、いつもの様に入ると、自分で頭、顔、体を洗えるようになっていました。まるでおじさんが洗うかのようにガーツと一人で洗っていてびっくりしました。R君のお父さんが洗い方や、流し方などを一つずつ教えてあげて、その通りに出来るようになっていました。少し笑ってしまうような洗い方だったけど、ちゃんと出来ていてすごいなと思いました。お風呂を出て、「R君が自分で洗えるようになったんだね。」と話す時、「修学旅行に向けて、自分で洗えるように一生けん命努力したんだよ。」と教えてくれました。六年生が一人でお風呂に入るの当たり前かもしれないけど、R君ができるようになるには大変なのです。毎日くり返し教えてあげて、くり返



し出来るだけ周りの環境を整えてあげ、出来た事をいっぱいほめてあげ、少しずつ出来る事を増やしていきます。将来、自分で生活するためにR君も頑張っています。

もう一つ、大変な事があります。嫌な事があると大きな声でさげんんだり、自分の頭を思いっきりたたいたりすることです。R君は、ゲーム、スウィッチ、ユーチューブが大好きです。ゲームには勝敗が付きものです。R君は、ゲームに負けるとおこってしまいます。小さいころは、周りがわざと負けていましたが、いつまでもこんなのではダメなので、ルールを作ります。おこるならゲームはやらない。負けてくやしいR君は、自分の頭をガンガンたたきます。ぼくは、R君とそのお母さんが、作ったルールを知っていても、わざと負けようかなと思います。どれだけ泣いてもR君のお母さんは、「ルールはどうだった。」と何回も聞いて、自分が「おこらない。」と言うまで聞き続けます。R君はちゃんと分かっているのです。でも、自閉症という障害の特徴で難しいのです。

ぼくは今、反こう期の最中です。自分でダメと分かっているにも注意されると腹が立ちます。自閉症と反こう期は全然違うものだけど、R君の気持ちがよく分かります。このぼくのイライラした感じ、誰も分かってくれない感じの気持ち、R君は毎日なのかなと思うと、とても大変だなと思います。

R君は毎日一生けん命生きています。R君が外出先や飲食店でさわいでしまう事があります。その時、冷たい視線を感じる事があります。確かに体の大きい子が、たくさんぬいぐるみを持って、頭をガンガンたたいて泣いていたら、何だろうと見てしまうと思います。でも、そんな時、怖いと思わないでほしいです。今、現実と一生けん命戦っているんだと、逆に応援してあげて欲しいです。

ぼくは、R君という存在がいて、自閉症というものを身近で感じることが出来ます。しかし、健常者が普段の生活の中で障害を意識して生活すると言われても難しいと思います。車イスに乗っていたら、足が不自由なの

かな。手話を使っていたら、耳が聞こえないのかな。つえを使っていたら、目が見えないのかな。と身体障害者の方なら気付けると思います。車イスがつかまっていたら、おしてあげる。ぼくは手話を使えないので、筆談で何となく手伝うことができます。でも、自閉症の方などは、何に困っているのか、どう接したらいいのかよく分かりません。

毎年やる二十四時間テレビでは、障害者の方が、色々なことにチャレンジしています。十五分位のコーナーには映りきれないほど大変だったのだろうと思います。このテレビでも、こんな人が居るんだと知るだけでも違うと思います。

毎年、四月二日は「世界自閉症啓発デー」というものがあります。この日だけでも、自閉症の事について、考えてみてほしいです。周りの人と話すだけでも、意識するだけでも変わると思っています。少しでも自閉症の方、障害を持っている方々が生きやすい世の中になってほしいなと思います。



# これからを生きる私たちに必要なこと

清須市立西枇杷島中学校二年

西田 百花

人生において、様々な課題にぶつかるとは避けられない。ぶつかって、それをどう解決していくかが重要だ。私も人との関わりの中で悩み、乗り越えた経験がある。

彼女と私は空手の道場で出会った。同い年であり、そして、彼女は聴覚障がい者だった。当時小学生だった私は、自分の名前の指文字を覚えて、彼女に披露した。彼女は大きく頷いて、にっこり微笑んだ。しかし、彼女が聴覚障がい者であることは、彼女とのコミュニケーションを私から遠ざけていった。今思えば、少しずつ彼女を避けるようになっていった気がする。そんなある日、お互いにスマホを持っていることを知り、連絡先を交換した。文字で話すことで、それまで億劫だった彼女との会話もスムーズに進んだ。彼女の優しさに改めて触れることができ、会話を楽しむことができた。

彼女は聴覚障がい者であったが、その点を無視できる文字での会話によって、彼女と私は再び良き友になることができた。スマホをはじめ、便利なものが多くある世の中だが、それらを使って課題を解決していく力は、現代を生きる私たちにとって、欠かせないものなのかもしれない。しかし、それだけでは解決できないこともあった。

私のおじいちゃんとおばあちゃんは兵庫に住んでいる。父方の祖父母にあたり、伯父の家族と一緒に住んでいる。二人はずっと健康で、七十歳を超えても、毎日欠かさず二・三キロを歩くほど元気だった。ある日、私が

家に帰ると、父から

「おばあちゃんが入院した。」

と告げられた。以前にも、足が悪くて入院したことがあったので、あまり驚かなかった。しかし、翌週の様子を見に行った父親の話によると、寝たきりが続いているとのことだった。私と母は、おばあちゃんに会いに行くことにした。横になっていたおばあちゃんは、認知症も進行していた。私と母のことは、かろうじて覚えていて、私たちが来たことに気付くと、にっこり笑いかけてくれた。しかし、私たちがおじいちゃんと話をしていても、私がおばあちゃんに話しかけても、どこか上の空だった。

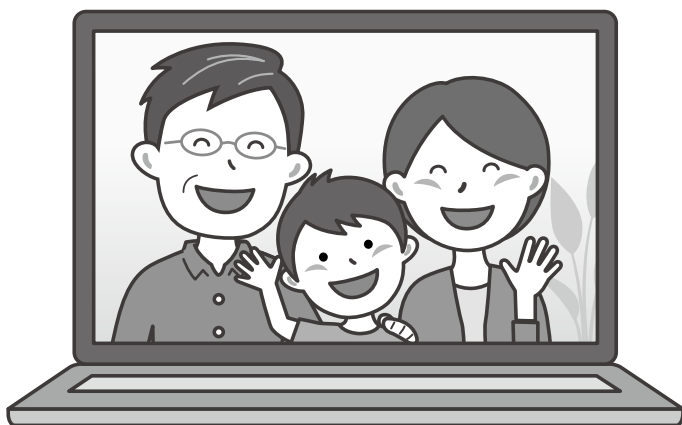
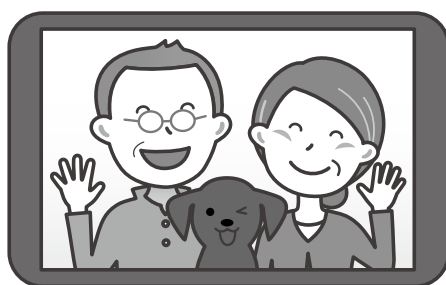
そのとき、私は、過去に元気に歩いていたおばあちゃんと目の前で寝たきりになっていくおばあちゃんとの違いに大きく戸惑った。おばあちゃんと上手く話をするができなかった。それは、おばあちゃんの認知症が進んでいたこともあったが、自分にも問題があったように思う。どう接したらいいか分からなかった。その反面、私の母は、もともと他人の感情に寄り添うことができることや、以前に介護福祉士の勉強を少ししていたこともあり、私よりも数倍はおばあちゃんとの接し方が上手だった。すぐにおばあちゃんとの会話も成立するようになって、おばあちゃんも母に気を許しているようだった。自分一人ではおばあちゃんと満足に会話すらできなかったが、母を見習い、少しずつおばあちゃんへの接し方が分かるようになった。

前者の出来事のように、もので解決できることもあるが、後者の出来事のように、もので解決できないこともある。そんなときは、一人で問題を抱え込まず、周りの人の力を借りることも大切である。誰かに相談したり、また、時間に身を任せたりすることも、課題を解決する上で、重要な選択肢の一つであると思う。

現代では、文明の進化と人とのつながりをどう共存させるかについて書かれた書籍が多く見られる。しかし、文明だけに頼るのではなく、さまざま



まな課題に対して、広い視野をもち、より多くの選択肢をつくることが大切だと思う。それが、新たな技術を活用することと、人の感情に寄り添うことの両方を求められる、現代に生きる私たちにとって必要なことである。



## 高齢者を支える介護

岡崎市立美川中学校三年

江坂

祐依

私が一歳のときにおじいちゃんは病気で手術をしました。そのときに脳梗塞になり、体は普通に動くけれど頭で思った言葉が出なくなってしまうて会話ができなくなりました。それでも私が十歳のときまでは会話ができなくても元気に動いたり、みんなで出かけたっていました。でもあるときからおじいちゃんが少しずつ動けなくなってベッドの上で生活する日が増えていきました。動けなくなっても頭はしっかりしていて元気に毎日すごしていました。本当だったらデイサービスの方がおばあちゃんにとっても負担が少なくて、おじいちゃんは会話ができないから行くのは拒否し、在宅介護の訪問型サービスを受けています。昼間、訪問入浴や訪問リハビリをしてくれる看護師さんや介護士さんが来てくれます。それ以外の日の二十四時間はおばあちゃんがおじいちゃんの介護をほとんどしています。けれど一昨年前におばあちゃんがしりもちをついて転んで、背中や腰が痛くなる圧迫骨折をしてしまいました。そのときはおばあちゃんも動くことが少なくなっていて寝ることが多くなったので、脚腰が弱くなつて起き上がるのが大変になってしまいました。そのころ私の父は県外に転勤していたので私の母がおじいちゃんとおばあちゃんの介護をしていました。半年ぐらいは母が二人の分のご飯も作ったりおじいちゃんの世話をしたりあげたり、私はおばあちゃんの負担がないようにいろいろな物事をしてあげたり会話をするときにも自分からおばあちゃんの部屋に行ってあげたりしました。会話は昔からよくしていたけれど、いつもおばあちゃんは話



をちゃんと聞いてくれるし、楽しいので止まらなくなりおばあちゃんも会話してくれて嬉しいと喜んでくれていたので私もとても嬉しかったです。

おばあちゃんはデイケアに行くようになり前のように動けるようになりました。でも脚腰は弱くなっているので階段の上り下りや立ち上がるのに時間がかかってしまうので、気づいたときには手伝ってあげています。

今はおばあちゃんがほとんど介護をしているけれど今後おばあちゃんも介護できなくなったら、父や母が介護をするようになると思います。そうすると父も母も仕事をしながらだと大変だと思うので日頃からお手伝いをたくさんしたいと思いました。

最近では、父、母、子だけから成る核家族で住む家が多くなっていると思いますが、私はおばあちゃんとおじいちゃんも一緒に住んでいると、父や母に聞けないことが聞けたり高齢者に対する思いやりや優しさが身につくと思います。これからは身内の人以外の高齢者にも困っていたら助けてあげたり、すれちがったときに明るくあいさつなどをしたいと思いました。

よくニュースでは介護に疲れて高齢者を殺してしまうという話を聞くことが多くなりました。それも核家族により頼る人がいなかったり相談を聞いてくれる人がいなかったりで、精神的に追い込まれてしまい殺してしまうことがあるのかなと私は思いました。

今の世の中では、人と人との関わりが薄れていると思います。近所の人とあいさつをしたりしなかったり、どんな人なのかわからないので今の時代は少しさみしい気がします。

おじいちゃんおばあちゃん、父母の時代とかだと兄弟が多いけれど、そのときに比べて年々減っていて今は一人っ子や兄弟の人数が少ないので何十年後かには一人を介護するのに一人もいないぐらいで介護をすることになります。だから私たちが大人になったときは大変になるなと思います。

これから私のおじいちゃんとおばあちゃんの介護が今よりもっと必要になってくると父母も大変になります。少しでも父母の負担が楽になるよう

に、私ができることを小さなことでも出来ることを増やして助けて楽しく介護ができると思います。



# 「利他共生」

一宮市立浅井中学校三年

福田 凧紗

「グループホームはここに居る人達全員が家族なんですよ」という職員の方の言葉を頭に置きながら今日一日ボランティア体験を頑張ろうと思えました。

まず初めに、おばあさん二人と職員の方と一緒に楽しくお話をしました。職員の方が離れた後、一人のおばあさんから、「あなた達はここを施設と呼んでいるの？」と険しい表情で尋ねられました。私は何と答えたらいいか戸惑いながらも、グループホームの名前を言つて、「施設とは呼んでいませんよ」と伝えました。おばあさんは「そうか」と言つて、安心した表情になりました。そして、「ここは温かくて明るくてとても良い所なんだよ」と言われたので私も同調しました。少し経つと、また険しい表情で質問をされました。私は一度目と同じ返答をし、おばあさんも同じ事を繰り返し話してくれました。そして、三度目の同じ質問をされた時、私は考えました。このおばあさんは、何を言ったら喜んでくれるのだろう。私は、おばあさんの返答を真似てみようと思いました。「ここは温かくて、明るくてとても良い所ですね」と言いました。するとおばあさんは、ほろほろと涙を流し「ありがとうね」と言いました。ずっと泣き続けるおばあさんを見て、隣でずっと聞いていたおばあさんが、そつと手を肩にのせて、「家族と離れてね」と言いながら、その方まで泣き出してしまいました。私は動揺し、おばあさんからありがとうと言われたことをすっかり忘れ、「どうしよう。泣かせてしまった」と悲しくなり、泣きそうになり

ました。その時職員の方が気づき、あえて話には触れずに、おばあさんにちり紙を手渡し、隣のおばあさんには、「何で〇〇さんまで泣いてるの？もらい泣き？」と声を掛けました。私は、そばで他の利用者さんと話をしていたのに、私達の会話も気にかけてくれていたのだと感じ、とても感動しました。私は三回目で答えを出すことができた嬉しさの半面、もつと早く気付いていれば良かったと反省しました。

昼食中、あるおばあさんが無表情で居る様子に気付きました。私はそのおばあさんが、口元に手を添えて口を隠す素振りをしていた事に気づき、「マスクですか？」と自分のマスクを指しながら聞きました。頷いていたので、職員の方に伝えたとこ、「いつも薬を飲んで、歯磨きをしてからマスクをつけるのよ」と教えてくれました。そのおばあさんは、いつもその素振りを見せるのだそうです。私はその時、余計な事を言つてしまい、職員の方に時間をとらせてしまったのかと不安になりました。しかし、職員の方が「薬を飲みましょうね」と言つて、薬を準備しに行つた時に、おばあさんが、「気付いてくれてありがとう」とニッコリして言つてくれました。その一言で、さっきまでの不安は消えて私まで嬉しくなりました。昼食後、私は元気なおばあさんの隣でちぎり絵を手伝うことになりました。おばあさんは、ちぎった紙をシールだと勘違いをしていたのか、はがそうと必死でした。「これはのりを付けて貼るのですよ」と伝えて、一緒に貼りました。おばあさんは「昔はできたんだけどね」と何度も言つていました。認知症になる前は簡単に出来た事が、今はできないと思つてみえることが伝わってきたので、認知症というのは、本人にとって、とても辛い症状だと感じ悲しくなりました。でも、今の私にできることは、楽しくちぎり絵を進めていく事だけです。そうして一緒に作業をしていくうちに、共感をするということの大切さを知りました。作業中、この表現は失礼かもしれませんが、おばあさんが紙を貼ることができたと共に感動したり、のりが塗れた事を共に喜んだり、これを何度も繰り返し返す事で、私の心は癒されて、とても温かくなり、愛しいと感じるようになりました。

このボランティア活動で沢山の事を学び、感じ、考えるきっかけができました。認知症の方が、繰り返し尋ねる事に対して「さっき言ったよ」と言って不安にさせる事や、傷つける事を絶対に言わない。そして、何度も丁寧に寄り添い声を掛けてあげる事が大切だと学びました。私は初め「何かしてあげたい」という思いでした。しかし、私がしてもらっていたのだと感じました。利用者さん達と一緒に過ごすことで、心が穏やかになりました。

私の学校の目標には「利他共生」という言葉があります。今回のボランティア活動で、私の将来の夢、看護師への道がしっかりと見えました。他の人の為に尽くし、共に共感しながら生きる喜びを分かち合える、そんな人になりたいです。コロナ禍で大変な中、ボランティアの体験が出来た事には、本当に感謝しています。今後も夢に向かって、勉強していきたいと思えます。



## 「私がボランティアをする理由」

刈谷市立雁が音中学校三年

鍋田 颯希

「どうしてそんなことやの？」

私はボランティア活動と聞いたとき、そう思ったことがある。なぜなら、ボランティア活動は、社会のために動いても、自分自身に利益などが返ってくることはないからだ。しかし、そんな私も今は、積極的にボランティア活動に参加している。

私の心に転機が訪れたのは、中学生になってからだ。私の学校では、ボランティア活動などの奉仕活動が盛んで、ある回数ボランティア活動をすると賞がもらえるという取り組みがあった。中学一年生だった私は、賞が欲しい、という軽い気持ちでボランティア活動に参加するようになった。

ある日、私は朝から公園で行われる資源回収ボランティアに参加していた。私はその活動に参加するのは数回目だった。初めて参加したときはわからないことが多く、「指示されて動く」だったことも、慣れてきて「自分から動く」ことが多くなった。私が、遠い家から重い資源を持ってきてくれたお年寄の方に自らかけ寄り、資源を受け取ったときに、お年寄の方が、

「わざわざ来てくれてありがとう。」

と言ってくれた。ほんのささいなことかもしれないが、私にとってとても嬉しく感じた出来事だった。そう感じる事ができたのも、私が自ら考えて行動したからだろうと思う。私はこのときから、ボランティア活動の魅力に気づき始めた。



私が中学二年生のとき、新型コロナウイルスの影響で開催できていなかった、市が運営しているボランティア活動の募集があった。私は参加したいと思い、近くの保育園のボランティア活動に応募し、参加することになった。

当日、私は二歳児の教室にお世話になった。二歳の子どもたちはとても無邪気でかわいく、パワフルだった。遊戯室で一緒にダンスを踊ったり、本の読み聞かせをしたりした。時にはけんかを止めたり、トイレの声をかけをしたりもした。子どもたちが寝ている間にも、お絵かきをするためのシートを切ったり、おもちゃの片づけをしたりした。楽しいことばかりではなく、大変なことも多くあった。私は一日だけで疲れてしまったが、保育士さんたちは重労働を毎日こなしているのだなと考えると、改めてすごいと思った。

保育園での時間もあっという間に過ぎ、私は二歳の子たちにお別れのあいさつをして、

「今日は、ありがとうございました。みんなと遊べて楽しかったよ。また来るね。」

と言った。すると、その教室の子たちがみんな私にかけ寄って、

「ありがとう。」

「ぜったいまたきてね。」

と口々にはじけるような笑顔で言ってくれたのだ。また、その教室の担任の先生も、

「今日はありがとう。子どもたちの対応に手慣れていてとても助かりました。ぜひ来年も来てね。」

と言ってくれた。保育園で一緒に過ごしたのは数時間だったが、いろいろな言葉をもらって、私は少し感動してしまった。

たくさんのボランティア活動に参加して発見したことは、ボランティア活動は「人と人をつなぐ」ということだ。

資源回収のときや保育園に行ったとき以外にも、様々な場面で必ず誰か

が感謝の言葉を伝えてくれた。その瞬間は、私にとって人とのつながりを強く感じた瞬間だった。

「どうしてそんなことやるの?」

今、私がこの質問に答えるならば、

「利益よりも大切なものを得られるから。」

と答える。ボランティア活動は、社会のために動いても、自分自身に利益などが直接返ってくることはない。しかし、社会のための形のある行動が、感謝の言葉や笑顔などの形のないものとして自分に返ってくる。そんな言葉や笑顔は、金銭的な、物品的な利益よりも大切なもので、何より受け取ったときに嬉しいと感じることができる。

ボランティア活動は、活動内容や活動場所、目的など様々で、たくさん方法がある。よく見かける募金もその一種だ。まだまだ、私の知らないところでボランティア活動が行われている。私も、きつと誰かに支援されているだろう。しかし、される立場だけではなく、する立場へ変わる必要がある。利益よりも大切なものを得ることによって、人と人とのつながりを知り、自分自身の成長のために、これからもボランティア活動に積極的に参加していきたい。



# 人と人との心のつながり

知多市立知多中学校三年

金田 奈々

私が地域の方々と関わるうえで一番大切だと思うことは、あいさつです。あいさつは人と人との出会いの始まりです。会話の輪を広げたり、あいさつをきっかけにして、近所の方と顔見知りになったり、親しくなったりできれば、相手を思う心が生まれます。そうすれば、互いにそれとなく見守り支え合う関係になります。

あいさつの大切さは誰もが分かっているはずですが。しかし、なかなか声に出せません。

私は、小さい頃から両親にあいさつはとても大事だと言われてきました。昔は恥かしいな、無視されたらどうしよう、などと思っていました。けれども、あいさつをしてみると、相手から笑顔で返事を返してもらえ、とてもうれしい気持ちになりました。また、毎朝あいさつをすることで、一日をとっても気持ちよく過ごすことができます。

あいさつは、言葉の抑揚や、顔の表情で全然ちがう印象になります。笑顔で明るくあいさつをすると、自分だけでなく相手も笑顔になります。しかし、小さい声で暗くあいさつをすると、相手もが暗くなる場合があります。一人でも多くの人が元気よくあいさつをすると地域の方々との関係が深まります。

日本語には、多くのあいさつの言葉があります。外国語にはないようなあいさつがあり、あいさつをすることをとても大切にしています。そして、そのさまざまなあいさつには多くの意味が込められています。「おは

よう」という言葉は、歌舞伎が由来とされています。裏方や下っ端の方がねぎらいの意味を込めて使った「お早いお着きでございます」という言葉が変化して今の形になりました。また、その日初めて会った人にするあいさつでもあるので、夜でも初めて会ったら「おはよう」とあいさつをするそうです。

「こんにちは」という言葉は、「今日は御機嫌いかがですか」というのが由来で、明治時代の教科書に「今日は」以降が省略され「こんにちは」と書かれていたことで広まったとされています。

「こんばんは」という言葉は「今晚は○○ですね」というのが由来になっているそうです。この三種類のあいさつは、相手を祝福する言葉が機能的になり、呼びかけ言葉になりました。

最近では、一人で生活をする高齢者の方々が増えてきています。人と話す機会があまりない方も多くいると思います。

登下校中に一人で散歩する方と実際、よくすれちがいます。こちらからあいさつをするとほとんどの方があいさつを返してくれます。会う頻度が多くなることにより、学校のことや家族のことを話すようになりました。いつもの時間に会わないと、自分だけでなく相手も心配してくれる関係になりました。あいさつが飛びかう地域は、活気があるためか犯罪が少ないと聞きます。

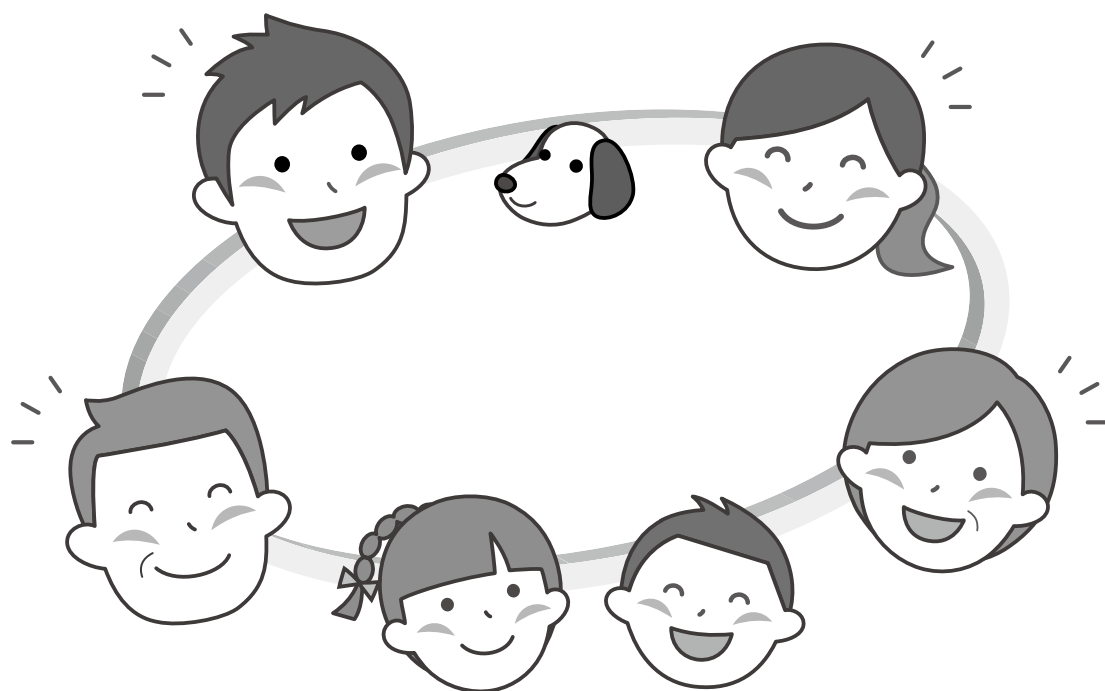
私が近所の方と話していて驚いたことは、「中学生になると恥かしがって全然あいさつを返してくれないんだよね」と言われたことです。私もあいさつを返してもらえないことがあって悲しかったので、いくつになっても笑顔であいさつをするのを続けていくことが大切だと思います。私は、小学校の頃からスクールガードというボランティアの方々に見守られてきました。中学生になっても自分の名前を覚えてもらっていて、とてもうれしかったです。地域の多くの方々によって自分達が事故や犯罪から守られていたということに気づかされました。

最近では高齢者の方が振り込め詐欺にあうニュースをよく目にします。今



まで多くの方々に見守られてきたので、これからは私達が何か力になれたらなと思います。

あいさつは人と人との心のつながりを深め、一日をさわやかに過ごすためにとっても大切なものです。毎日を充実させるために、今以上にあいさつを心がけ、多くの人とコミュニケーションをとっていききたいです。





## 理想の介護福祉士になるために

愛知県立宝陵高等学校一年

太田 愛唯

「もう後悔したくない。」そんな思いから、私は高校の福祉科に入学しました。

私は、小学四年生の時に曾祖父を亡くしました。曾祖父の家に遊びに行くと、必ず給をくれる大好きな曾祖父でした。当時の私は、大好きな曾祖父が病気でだんだんと弱々しくやせ細り、別人のようになっていくのをただ見ていることしかできませんでした。私は、そんな自分が情けなく、悔しく思いました。それと同時に、もしもこの先、祖父母や両親が曾祖父のように介護を必要とする状態になった時には介護を通して今までお世話になった恩返しをしたいと思うようになりました。そして、この春、私は念願の福祉科に入学することができました。ようやく介護の勉強ができることに嬉しい気持ちでした。福祉科での学習は、覚えることが多く大変に感じることもあります。どの科目も興味深い内容で楽しく、頑張って学習に臨むことができます。

先日、障害者施設での四日間の介護実習がありました。授業等で実習に向けて準備や学習してきたものの、まだまだ先のことだと思っていたし、入学して三ヶ月ということもあり、実習前はとても不安でした。

実習初日の朝、ドキドキしながら実習先へ向かいました。施設に到着すると、入口の前にいた利用者の方が「おはよう。どうぞ入ってください。」

と声をかけてくださいました。少し驚いたけれど、緊張が和らいだ瞬間でした。実習が始まり、私は授業で習った視線の合わせ方や質問の仕方を出し、利用者の方とコミュニケーションを図ることを試みました。けれど、うまく言葉のキャッチボールができず、会話は盛り上がりませんでした。翌日からは、利用者の方と楽しめる会話がしたいと思い、予め話題を考え、自分なりに準備をして臨みました。また、傾聴することを意識してコミュニケーションを図るようにしたところ、最終日には利用者の方に私との会話を楽しんでいただけようになりました。

初めての实習で、私が一番驚いたことは、障害があっても、周りの状況に目を向け、他者を気遣うことができるということです。職員の方ではなく、利用者の方が別の利用者の方の車椅子を押して移動のサポートをしている姿を目にしました。また、私が屈んで会話をしていると「これを使ってください。」と椅子を持ってきてくれる方もいました。私は実習へ行くまで、障害のある方は相手の気持ちを考え、他者を気遣うことが苦手という勝手なイメージで、偏見を持っていたため、とても驚き、介護を学ぶ者として、自分自身を恥ずかしく思いました。

短い実習でしたが、実習中は多くの職員の方から「利用者さんができることは、自分でやってみよう。」という助言をいただきました。学校の授業でも習っていたので、もちろんその大切さはわかっていました。ですが、実際に行ってみると、とても難しいことだと実感しました。頭では理解できていても、利用者の方の力になりたいという思いから、つい、できることまでサポートしてしまうことが度々ありました。困っていることをすべて手助けすることが支援ではなく、よかれと思ってやったことであっても、ご自分でできることまでやってしまうと、その方の能力を奪うことになるため、待つ、見守ることも大事な支援の一つであると、改めて学ぶことができました。また、利用者の方ができることと、支援が必要なことを見極めることの難しさを痛感しました。それらを見極めるには、個々の障害特性や症状等を理解することに加え、支援をする時には、一人一人の

思いを踏まえ、意欲を引き出すことも必要とされるため、コミュニケーション能力を高めることも求められるとわかりました。今後の実習では、利用者の方ができることは、ご自分で行えるように支援していけるよう努力していきたいです。

初めての介護実習では、どのような方が施設を利用しているのか知ることから始まり、利用者の方との関わり、実際に支援させていただく中で、多くのことを学び、介護の難しさや奥深さを感じました。どのような方の支援をする時も「もし自分が同じ立場だったら」と、その方の立場に立ち、利用者本位の支援ができる介護福祉士になれるように、これからも学習や実習に頑張って取り組んでいきます。



## 「おまご」

学校法人さくら学園  
安城生活福祉高等専修学校 一年

檜垣 光里

「私ね、毎日日記を書いているの、今日ここで貴方とこうして出会えた事を忘れない為に、貴方の名前をここに書いてもらえないかしら？」こんな事を言われたのは初めてでした。私との思い出を忘れないでいてくれるんだ。そんな事を思っていたら私は涙が出そうになりました。渡された紙に自分の名前を書き、その紙をまた利用者さんへ渡した時、「光に里と書いてきらりと読むのね。すごく素敵な名前ね、教えてくれてありがとう。この紙一生大切にするわ。」と言ってもらえた時は、この方と出会えて良かったなと今までの中で一番思えた瞬間でした。この体験は、今年の夏、デイサービスへ行った時の出来事です。

私が初めて「福祉」という言葉に出会ったのは、私がまだ幼稚園児だった頃です。私の家族は福祉の現場で働いている人が殆どです。家族で食卓を囲む時の話の内容は、福祉に関する話が多く、私もよくその話を聞いていたり、母が立ち上げた老人ホームに連れて行ってもらい、利用者さんのコーヒーを入れたり、利用者さんと一緒にレクリエーションをしたり、コミュニケーションを図ったりと小さい頃から福祉について学べる場所が身近にあった私ですが、福祉にはあまり興味はありませんでした。ですから、自分から老人ホームに行くという事をしませんでした。ですが高校に入学し、福祉の勉強や実習などを通し、私の福祉に対しての考え方が変わりました。小さい時は老人ホームに居る高齢者の方達は、家での生活が出来なくなり職員の方が「お世話」をただするだけだと思っていました。で



すが高校生になり、福祉について勉強をしていくうちに老人ホームで仕事をしている職員の方たちは、老人ホームで生活をしている利用者さんの「お世話」をするのではなく、食事や入浴、そしてトイレなど日常生活で必要不可欠な動作を「サポート」をする仕事なんだと私は思いました。

そして私が一番福祉に対しての考えが変わったのは、夏休み中に行った介護実習です。私自身介護実習に行く事がすごく不安でした。利用者さんや職員の方と上手くコミュニケーションが図れるのだろうか。利用者さんと会話をしている時に失礼な事を言ってしまうのだろうか。話題をふられた時に黙り込んでしまわないだろうか。考えれば考える程にマイナスな事を思いつき、ネガティブになる事が多くあり、実習前日はすごく不安でした。そして実習当日、実習先へ無事辿り着き数十人いる利用者さん達の前で挨拶をする際、私はすごく緊張していました。そんな時、私の立っている場所から一番近い机に座っていた利用者さんに「大丈夫よ。なにも緊張する事なんて無いから。」と言ってもらいました。その言葉を聞き、私の緊張して硬くなっていた体が少しずつ軽くなっていく気がしました。その後からは、色々な利用者さんとコミュニケーションが図れるようになりました。そして、私にはじめに声を掛けてくださった方達ともお話がしたくて、勇気を出しその利用者さん達の机に行き、「私も一緒にお話聞いてもいいですか？」とたずねました。すると利用者さん達は笑顔で「いいわよ！一緒におしゃべりしましょう！」と言ってくれました。その机に居た利用者さん達からは、たくさんのお話を聞かせてもらいました。利用者さん達が高校生だった頃の話、趣味や特技の話、自分の家族の話、そして戦争の話。どの話もすごくおもしろく勉強になる話ばかりでした。私の事にもたくさん興味を持って頂いて色んな会話が出来たのがすごく嬉しかったです。職員の方にも「光里ちゃんは話を聞くのがすごく上手だね。」と褒めて頂いた事もすごく嬉しかったです。実習も終盤になり利用者さん達が帰宅の支度を始めた際に、最初に私に声を掛けてくださった利用者の方が私に、「私ね、毎日日記を書いているの、今日ここで貴方とこうして出

会えた事を忘れない為に、貴方の名前をここに書いてもらえないかしら？」と言われ、渡された紙に自分の名前を書きました。その紙を渡した際に「光に里と書いてきらりと読むのね。すごく素敵な名前ね、教えてくれてありがとう。この紙一生大切にするわ。」と言われ、利用者さんが帰宅する際も、「光里さんは立派な看護師になれるわ！おばさん応援してるからね！」とおっしゃってくださり、私は思わず涙が出そうになりました。「今日来て良かった。」心からそう思いました。

小さい頃は「介護なんて」と思っていた私ですが、自分がその場に立ち色んな知識を得て、経験を積むことで、考え方がガラリと変わる事に気が付きました。この実習で学んだ事や経験した事、そして出会いを大切に、これからの人生に活かしていきたいと思いました。





# コミュニケーションの重要性

愛知県立桃陵高等学校三年

忠政 侘奈

私が、施設実習を通して一番重要だと感じた事は、コミュニケーションをたくさん取ることです。

まず、コミュニケーションがなぜ介護技術よりも重要かという点、コミュニケーションを取っていれば、利用者さんとの信頼関係が築けるからです。私が利用者さんの立場だったら、初めての介護職員さんにおむつを替えてもらうより、いつもの職員さんをお願いしたいと思います。それは信頼関係が築けているからです。実際に私が実習先でバイタルチェックをさせて頂いた時、女性の利用者さんに「学生さんにやってもらうのは緊張するから、いつもの職員さんをお願いしてもいいかしら。」と言われてしまいました。それで職員さんを探していると「上手に測れるかの心配じゃなくて血圧が上がるのが怖いだけよ。」とフォローまでして頂きました。このような体験からコミュニケーションの重要性を知ることができました。しかし、介護技術も信頼関係を築くためには必要です。良い支援をすれば利用者さんにたくさんの「ありがとう」を言って頂けます。私は実習中にありがたうを聴くたびに「もっと頑張ろうと力が出てきました。私が思う良い支援とは、利用者さんに気分良く利用してもらおう事です。そのために、学校内での実習はとても大切だと感じますが、実習相手はクラスメイトです。クラスメイトとペアを組んで、アドバイスを言い合い技術の向上を図る事はできますが、実際の施設のような緊張感はありません。そのため、学校内の実習だけでは実際の利用者さんに満足してはもらえないと思いま

す。普段の実習でも言葉遣いや表情に気をつけながら行いました。その結果、実習先での声かけや言葉遣いに困る事がなく実習を行うことができた。しかし、言葉遣いが丁寧でも私はコミュニケーションを長く続けることができませんでした。なぜなら、どこまで利用者さんに踏み込んでいいのかが分からなかったからです。自分の祖母には、「昔はどんな仕事をしていたの。」と聞くことができて、利用者さんには辛い過去があるかもしれないなど深読みをしすぎていました。そんな時に、職員さんから「利用者さんは優しいのでなんでも話してみてください。」と教えて頂き、私は「どのような話が利用者さんと楽しめますか。」と質問しました。すると職員さんは「利用者さん一人一人好きな物は違うので、まず回想法などを用いて昔の話を聞いてみたらどうでしょう。」とアドバイスをしてくださいました。男性の利用者さんに「昔はどんなお仕事をされていたのですか。」と質問をしたところ、「実は電車の運転をしていたんだよ。」とお話をして頂き、「運転って難しいですか。」や「切符とか切っていたのですか。」と質問をしていくうちに、利用者さんのお家族の話や旅行に行った場所など様々なお話ができました。約一時間ほどお話をさせて頂き、最後に「たくさん話ができて楽しかったよ。」と言って頂けて、とっても幸せな気持ちになりました。他にもレクリエーションの際には、貼り絵が難しい男性の利用者さんに、「一緒にやらせて頂いてもいいですか。」と自分から声をかけました。色々な会話をしていくうちに、私は利用者さんを生まれる前に亡くなった自分の祖父のように感じ、また、私を呼んでこそそそっと小話をしてくださった女性の利用者さんをコロナ禍で会えなかった自分の祖母に重ねてしまう程、利用者さんは温かい方がたくさんいらっしゃいました。この経験は、コミュニケーションの取り方を学ぶ事や昔の生活を知る良い機会になりました。

二年間学んだ生活支援技術では、実習先で使える介護技術がたくさんありました。特に杖歩行の介助です。私が行った実習先では自立度が高い方が多くいらつしやり、食事介助などはなかったものの、浴室までの移動な



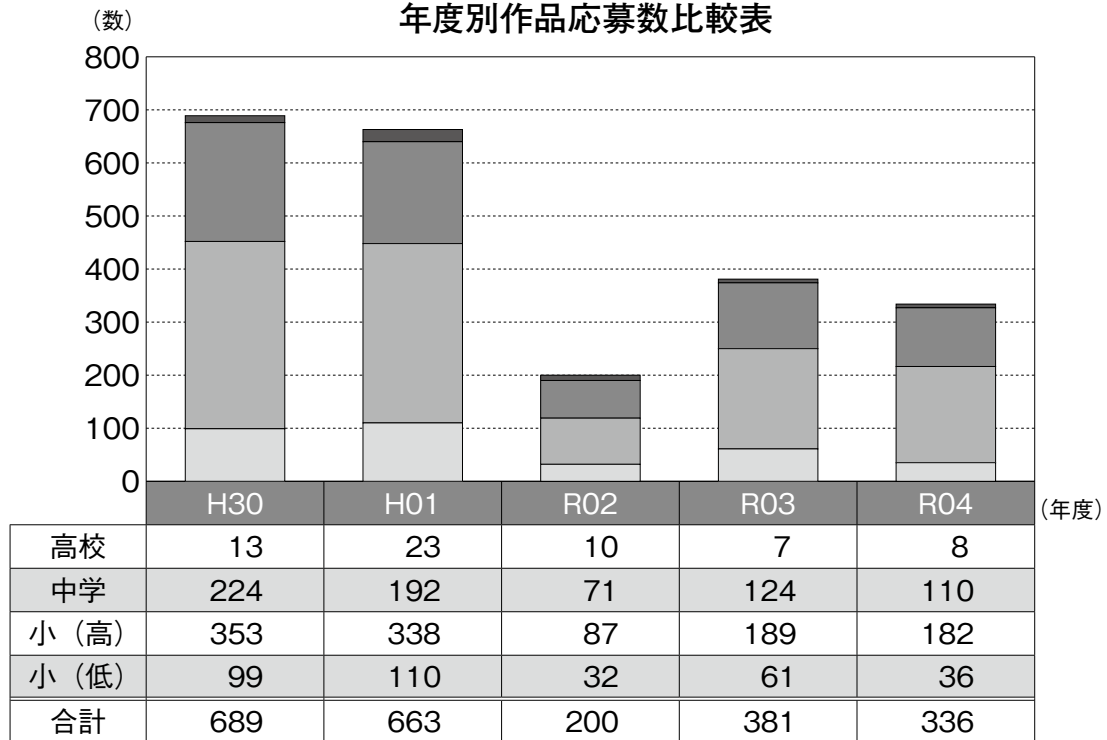
どに役立ちました。そして何かをやり続ける努力と力が身に付きました。私は今年から保育の授業を選択しましたが、子どもも同じで信頼関係を築くにはコミュニケーションを取ることが重要だと思っています。一人一人に寄り添って優しい気持ちを持つことで子どもは成長していきます、そして、優しい人へ育っていくと感じます。夏には幼稚園実習が待っています。介護の現場で学んだ事もきつと活かせると思うので、新しい事をたくさん吸収して頑張っていきたいです。

私は将来言語聴覚士になることが夢です。その仕事をするにはコミュニケーション能力が必要です。介護と保育で学んだ事を活かして療育に関われるよう努力したいです。また、進学先でもたくさんの方の実習があります。自分がこれまでに得た、やり続ける力を発揮して国家資格取得を目指していきたいと思います。

これからも、相手への思いやりや信頼関係を築いていく事を大切にしていきたいです。

■ 福祉体験作文コンクール ■

《応募状況》 応募総数 336編



《審査経過》

福祉体験作文コンクール選考委員会を次の方々に依頼し、募集要項に基づき厳正なる審査をし、部門毎に優秀作品を決定しました。

福祉体験作文コンクール選考委員

(敬称略)

船尾 日出志 愛知教育大学名誉教授  
 松本 享子 愛知県教育委員会義務教育課指導主事  
 岡崎 千賀子 愛知県教育委員会生涯学習課主査  
 三好 宏和 AJU自立の家わたちコンピューターハウス  
 ユニバーサルサービス事業部  
 江口 康彦 愛知県身体障害者福祉団体連合会常務理事兼事務局長  
 堀部 直哉 北名古屋市社会福祉協議会事務局長  
 西尾 浩志 愛知県社会福祉協議会地域福祉部長

## 令和四年度 福祉体験作文コンクール募集要項

### 一、趣旨

児童・生徒が、学校内外で体験する福祉活動やボランティア活動は自己の幅を広げるための豊かな経験となるものであり、ともに生きる福祉の心を育ててくれるものです。

こうした経験を通して感じたことや考えたことを、素直な気持ちで作文に表現したものが心に残り、日常生活の中で広がっていくことを期待して、福祉体験作文を募集します。

### 二、主催

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

### 三、応募対象

趣旨に賛同する愛知県内（名古屋市を除く）の小・中・高等学校及び特別支援学校の児童・生徒

### 四、応募作品の内容

学校での福祉実践教室やボランティア活動等の体験、地域や家庭、身近などでの体験について、自分の考えや感じたことを表現したものとします。

### 五、部門

- (一) 小学校低学年の部（一～三年生）
- (二) 小学校高学年の部（四～六年生）
- (三) 中学校の部
- (四) 高等学校の部

### 六、作品規定

(一) 四〇〇字詰め原稿用紙（タテ書）を使用し、各部門の枚数制限は次のとおりとします。

- ア 小学校低学年（一～三年生）——一～三枚以内（四〇〇字以上二二〇〇字以内）
- イ 小学校高学年（四～六年生）——二～四枚以内（八〇〇字以上一六〇〇字以内）
- ウ 中学校・高等学校——四～五枚以内（一六〇〇字以上二〇〇〇字以内）

※題名は一行目、学校学年氏名は二行目、本文は三行目から一マス空けて書いてください。

(二) 応募作品は、原則として自筆に限ります。ただし、障害等の場合はその限りではありません。その旨を明記してください。

(三) 応募作品には、所定の応募票を添付してください。

### 七、応募規定

(一) 小学校及び中学校の応募数は各部門二編以内、高等学校は三編以内とします。

(参考)

- 小学校低学年 一校につき 二編以内（一～三年生）
- 小学校高学年 一校につき 二編以内（四～六年生）
- 中学校 一校につき 二編以内
- 高等学校 一校につき 三編以内

(二) 応募作品は、未発表のものに限ります。

(三) 応募作品は、理由のいかんにかかわらず返却しません。

### 八、応募方法

下記の応募票を添付し、学校のある市町村の社会福祉協議会に令和四年九月十六日（金）までに応募してください。

### 九、選考

選考委員会を設けて、部門ごとに入選作品を合計二十五編程度選考し、令和五年二月（予定）に発表します。

### 十、表彰等

入選者には賞状、副賞及び優秀作品集を贈呈します。

### 十一、作品集の作成等

入選作品を掲載した優秀作品集を作成するとともに、入選作品は愛知県社会福祉協議会ボランティアセンターのホームページに掲載します。







令和4年度  
第40回 福祉体験作文コンクール

# 優秀作品集

発行 社会福祉法人  
愛知県社会福祉協議会

〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目50番地  
愛知県社会福祉会館内

TEL(052)212-5502 FAX(052)212-5503

